



靖國神社の梅林・右奥は「守護憲兵之碑」

箴の梅

当協議会の会報『慰霊』第17号（平成22年4月1日発行）に、筆者は「梅



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 37 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1
靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952

<http://ireikyou.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能
発行人 岩田司朗
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

箴の梅	1
大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内	1
ビルマ（現ミャンマー）の 防衛作戦と慰霊①	3
自衛隊山岳連盟が慰霊登山	7
ガダルカナル島遺骨収容活動報告	9
事務局からの報告等	14
協議会参加各団体の本年度慰霊行事予定	16

大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内

当協議会は、当協議会参加諸団体と共に、平成28年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を左記のとおり執り行います。

記

一 時期 平成28年7月9日（土）（参集殿集合 11時40分）
二 場所 靖國神社

三 次第
① 式典・昇殿参拝 12時～ 拝殿・御本殿
② 直会 13時30分～ 靖国会館

四 参加費
① 式典・昇殿参拝（玉串料） 2000円
② 直会 5000円

皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。
会員の皆様には、本誌同封の払込取扱票による参加費ご納入をもって、ご参加申込みにご替えていただきます。

会員以外の方は、当協議会事務局までお問い合わせください。

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1

靖國神社遊就館内・地階

（公財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局

電話 03-6380-8943

FAX 03-6380-8952

Eメール bck05197@nifty.com

花二題」と題して「○梅花に寄せる」と「○咲くやこの花」の拙文2本を掲載させていただいた。前者は、靖國神社本殿・拝殿南側の境内にある「守護憲兵の碑」にお参りした際、その脇の梅林に咲き初めた紅白の梅の芳香に触発され、初春の梅にまつわる思い出、謡曲の中に謡われた梅花、万葉集を始め多くの和歌集に収録された梅花を詠んだ古歌等について、後者は、当時放映されていたNHK土曜時代劇「咲くやこの花」に触発され、謡曲「難波」の主題である「難波津の梅の歌」の由来（百済国から渡来した博士の王仁が詠んだとされる「難波津に咲くやこの花冬籠り今を春べと咲くやこの花」の和歌の心は、仁徳天皇の御即位をよそえ奉った歌であるという）を中心に書いたものである。

今回取り上げた「箴の梅」とは、謡曲『箴』に出てくる、昔生田の森での

源平の合戦の折、源氏の名将梶原平藏景時の嫡男源太景季が、梅の一枝を簞(矢を入れる武具)に挿し、笠印(戦陣で隊を弁別するため、兜又は袖に付ける標し)として戦い、功名をなしたという。景季はこの梅を、八幡(源氏の氏神)の神木と敬ったことに由来するものである。紅波楯を流し、白刃骨を砕く修羅場の戦場においても風流の心を忘れず、散り際を花の如くに潔くしようとした古の武将の心が現れている。

謡曲の中に謡われた生田川の合戦の様は、「血は啄鹿(たぐく)の河となり、紅波楯を流しつつ、白刃骨を砕く、苦しみ、月をも日をも、手にとる影かや長夜(じやうや)のやみやみと眼もくらみ、心も乱るる修羅道の苦しみ、・・・げにげに見れば恐ろしや、剣は雨とふりかかつて、雲に響きて地に動く、山も震動、海も鳴り、雷火も乱れ、悪風の、紅焰(こうえん)の旗をなびかし紅焰(こうえん)の旗を靡(ひ)かして、闊浮(くわんぶ)に帰る生田川の、浪を立て水を返し、山里海川も皆修羅道の巷となりぬ、こはいかに浅ましや、暫く心を静めてみれば、所は生田なりけり、時も昔の春の、梅の花盛りなり、一枝手折りて簞にさせば、もとより窈窕(みよび)たる若武者に、相逢ふ若木の花かづら、かくれば簞の花も源太も我先かけんさきかけんとの、心の花も梅も、ちりかかつて面白や、

敵の兵(つわもの)これを見て、天晴れ敵よ遁すなとて、八騎が中に取りこめらるれば、・・・」(大意・川をなす血の波は楯を流す程強く、白刃は骨を砕き、そのきらめきは日月の光のようで眼も眩み、心も乱れる修羅道の苦しみ・・・本当に恐ろしい。剣は雨と降りかかり、天地、海山も荒れ火も乱れ、風は赤旗を焰の様に靡かし、この川に波を立て、どこも皆修羅の巷となった・・・暫く落ち着いてみればこは生田であつた。昔同様、春は梅の花盛りだ。一枝折つて簞に挿すと優雅な若武者にふさわしい若木である。自分も梅の様に先駆けの功名を立てようと勇んで敵陣に入ると、花が散つて面白い。敵はよい相手と見て八騎程で取り囲んだ。・・・)と謡われている。

「一 春まだ浅き 戦線の

古城にかおる 梅の花
せめて一輪 母上に
便りに秘めて送ろうじやないか
二 覚悟をきめた 吾が身でも
梅が香むせぶ 春の夜は
戦忘れてひとときを

語れば戦友(とも)よ愉快じやないか
三 明日(あした)出てゆく 前線(せんせん)で
何れが華(はな)と散ろうとて
武士(ぶし)の誉(ほ)じゃ 白梅(はくばい)を
戦闘(せんとう)帽(ぼう)にさして
行こうじやないか

筆者らが陸士の教育を受けた昭和20年当時、既に戦局は極めて厳しく、空に、陸に、海に、特攻を覚悟の激しい訓練の最中にあつても、「花も実もある武人たれ」と教えられた。武士道の真髓(しんすい)を心得よとの教えであらう。

武士とは、上に立つ者のことであり、武士道とは、その武士の思想、行動を言うのである。武士は、封建時代当時の士農工商の社会においては、最高の身分である。だからこそ、高い道徳性や規範意識を要求された。武士道とは、その国民への作法を説いたものである。新渡戸稲造の『武士道』(1899年(明治32年)英文初版)も、西欧の騎士道と比較しながらノーブレス・オブリージュ(高い身分に伴う義務を説いたものであるが、その原典となつたのは、宝永7年(1710年)に、佐賀藩士山本常朝の口述を同藩士田代陣基によつて記録が始められ、享保元年(1716年)に脱稿した『葉隠』であり、その『葉隠』こそは、単なる武の書であるのではなく、武士としての、

否、日本人としての作法の書なのである。「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という最初の言葉は、『葉隠』を貫く大きな幹であるが、これが意外と誤解されているようである。しかしよく読んでみれば、『死の哲学』である以上に、『生の哲学』であることが分かる。(詳しくは、ノンフィクション作家青木照夫著『いま、なぜ武士道なのかー現代に活かす『葉隠』100訓ー』(株)ウェッジ発行「ウェッジ文庫」2008年4月28日第1刷発行を参照。)

そして、陸士の教育では、何よりも部下を大切にし、部下の信頼を得るようにせよ、との教えであつた。日常の訓練においても、戦場においても、将兵一体となつて任務の遂行に当たらないければ、目的を達成することはできないからである。部下の信頼を得るには、情・理共に兼ね備えた品格と、決断力及び実行力が必要である。将校は、部下と生死を共にする、否、部下の命を預かっているとの覚悟がなければならぬ。特に戦場において、将校たる者、自分の水筒の水は、自ら飲み干すことなく、部下の末期の水として必ず取っておくものである、と教えられたものである。今の世の社会のリーダーたちにとっても必要不可欠の資質と言えよう。(飯田正能記)

ビルマ(現ミャンマー)の 防衛作戦と慰霊①

専務理事 圓藤 春喜

一 はじめに

太平洋戦線の米軍の反攻に連携し、ビルマ戦線においても、昭和17年末、18年初頭にかけて、西方からは英印軍の、北方からは米支軍と重慶軍の雲南遠征軍の反攻の兆しが顕著となり、大本営は、昭和18年3月27日、ビルマ方面軍を創設、ビルマの防衛を担当させることとなった。

今回は、昭和18年初頭以降のビルマの防衛作戦について、数回に分けて紹介することとしたい。

二 ビルマの地理等

ビルマの地理は、図1のとおりであり、面積は、約68万km²で、日本の約1.8倍、北部は中国に、西部はインドに、東部はタイに接し、国境地帯はほとんど険峻な山地となっており、熱帯モンスーン気候で、大部分が密林に覆われている。雨季(5月中旬～10月)と乾季(10月末～5月上旬)があり、雨季には道路も泥濘化し、通行は困難となる。特にインドとの国境地帯は、世界再多雨地域である。乾季には地面は固まり、車両の通行が容易になる反面、

築城を困難にした。

中央部は平地が多く、稲作に適し、米の一大産地である。

河川は、北方高地からベンガル湾に向かって大河イラワジ川とシッタタン川、サルウィン川が南流している。

印緬国境の険峻な山地を通る道路は、北方のレド公路、中部のインパール・カレワ道、ベンガル湾沿いのアキヤブを通る3本が主要な道路であった。中緬国境を通る道路は、拉孟・ラシオを通る道路が主要なものであった。

人口は、約1600万人で、中央平原地部にビルマ族が、国境地帯には少数民族が居住していた。

政治的には、昭和17年5月に日本軍

が全土を占領、8月にバー・モウを首班とするビルマ中央政府とビルマ防衛軍を設立し、ビルマを独立させた。

昭和初期から独立運動の学生リーダーとして活躍していたアウン・サン(ビルマ名オン・サン、アウン・サン・スー・チー女史の父)は、初代ビルマ防衛相に就任している。

日本軍の占領当初目的であったビルマ防衛軍も、昭和18年に入ると、日本の敗色が濃くなり、離反する者が多くなりつつあった。

三 ビルマの防衛作戦

1 連合軍の反攻

連合軍の反攻は、昭和18年1月、西部のアキヤブ地方への英印軍の侵入に始まり、2月中旬の中央部へのウイ

ンゲート旅団の侵入、10月下旬の雲南正面とフーコン河谷への米支軍の侵入と続いた。

連合軍は、昭和18年10月16日に、これら各正面の作戦を統合するため、東南アジア連合軍司令部を創設、19年1月9日に反攻作戦計画を策定した。

その骨子は次のとおりである。

- ① 陸上からアキヤブを攻略する。
- ② スティルウエル中将指揮の米支軍により、レド公路から攻撃する。
- ③ 米支軍の作戦を容易にするため、ウィンゲート旅団の長距離挺進作戦を実施する。
- ④ チンドウイン川に橋頭堡を確立し、②と③の作戦を容易にするため、英第4軍団による牽制作戦を実施する。(後日、日本軍をインパールに引き込んで撃破する構想に変更)

この計画に基づき、19年2月上旬には、アキヤブ地方への英印軍の再度の侵入、3月上旬には中央部へのウィンゲート旅団の再度の侵入があり、ビルマ方面軍隷下部隊は、これら反攻への対処を余儀なくされた。

また、インパール盆地正面においても、英印軍第4軍団の行動は、逐次活発化しつつあった。

以下、各段階の日本軍の防衛作戦に

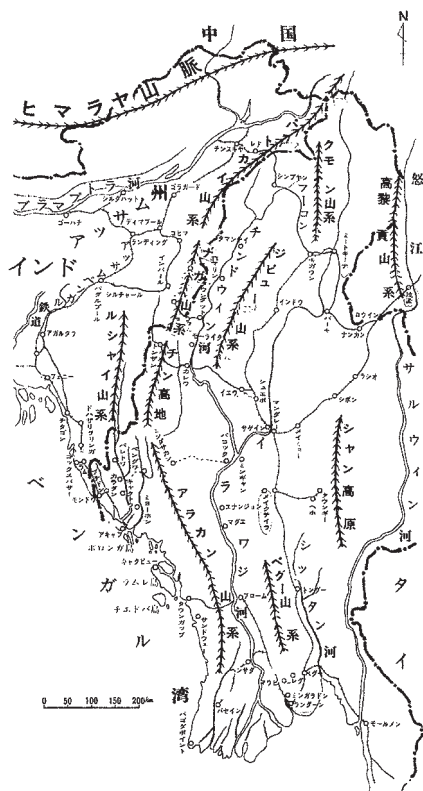


図1 ビルマの地理等

ついて、順次紹介する。

2 第1次アキャブ作戦と第1次ウィングート旅団侵入対処(昭和17年12月末～18年5月中旬)

英印軍1個師団(インド第14師団)基幹の敵が、昭和17年12月末、ベンガル湾沿いの印緬国境から侵入、南下を開始した。この状況を把握した第15軍司令官(飯田中将)は、北緬から南下

中の第55師団(長・古閑中将)に対し、この敵の撃破を命じるとともに、アキャブ守備に任じていた宮脇支隊に対

し、ドンベイク、ラチドンの前進陣地確保を命じた。

宮脇支隊の前進陣地守備隊は、18年1月初旬～3月中旬の間、支隊主力の増援を得つつ、インド第14師団の数次にわたる攻撃をその都度撃退し、第55師団主力の集中に必要な時間と攻勢の支とうを確保した。

第55師団主力は、図2のように、部隊の集中を待ち、3月14日、一斉に攻勢に転移し、英印軍に対し迂回・包囲攻撃を行い、チズエ、次いでインデン

において敵師団主力を撃破、爾後戦果を拡張し、5月中旬には印緬国境のモン

ドウ、ブチドンの線に進出した。

この戦いで、英印軍第14師団は、壊滅的損害を受けたが、次のような教訓を得ている。

- ① 第一線部隊は包囲されても陣地を固守し、後退しない。
- ② 上級司令部は、戦略予備を持ち、解圍攻撃により包囲中の日本軍を撃破する。
- ③ 被包囲下の部隊に対しては、空中補給により兵站支援を確保する。

この教訓をもとに、図3のような立体防御戦法(日本軍は円筒防御と呼称した)を考案し、爾後のアキャブ正面の作戦とインパール作戦に活用した。

この侵攻に連携して、2月中旬からアラカン山脈越えて北部ビルマ地区に侵入し、

空輸補給で戦いを続け、後方を攪乱する勢力不明の遊撃部隊

(ウインゲート旅団)があり、北部方面軍から参加した参謀は、補給に致

ビルマに展開中の部隊は、第18、第33師団主力と第55師団の一部で掃討作戦を展開するが、広大な地域に分散した敵に振り回され、掃討までに約2ヵ月を要している。

この時、第18師団長であった牟田口中将は、この作戦で「インパールの敵を覆滅しなければ、ビルマ防衛は成り立たない」との認識を持つに至り、これがその後のインパール作戦の伏線になったと言われている。

3 ビルマ防衛機構の刷新と防衛構想の検討

連合軍の本格的反攻に対処するため、昭和18年3月27日に、1個軍、5個師団からなるビルマ方面軍(軍司令官・河邊中将)を新設し、ビルマ方面の部隊を統一指揮下に置くとともに、第15軍司令官に牟田口中将を充てた。

第15軍司令官は、「ビルマ防衛のためには、反攻拠点のインパールを攻略し、英印軍の機先を制する必要がある」との認識の下、インパール作戦を立案し、方面軍司令官に上申した。

方面軍は、18年6月24～27日の間、第15軍司令官の作戦計画案に基づき兵棋演習を実施し、チンドウイン川西方への防衛線の推進(インパール作戦)について検討するが、大本営、南方軍、

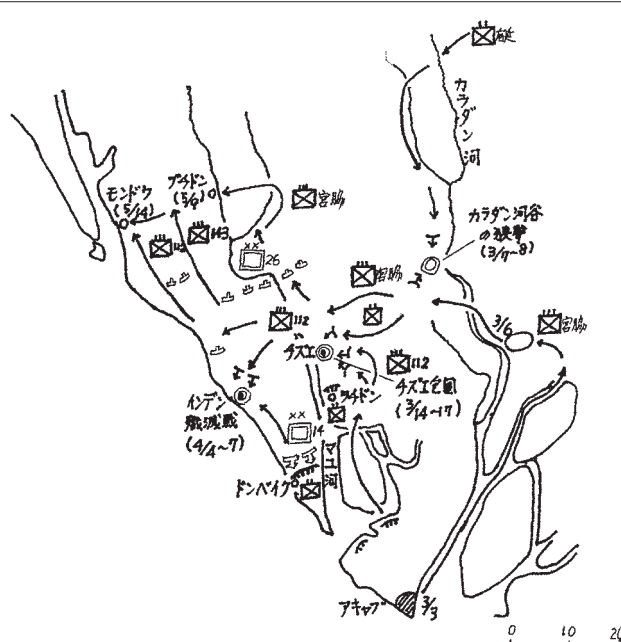


図2 第1次アキャブ作戦

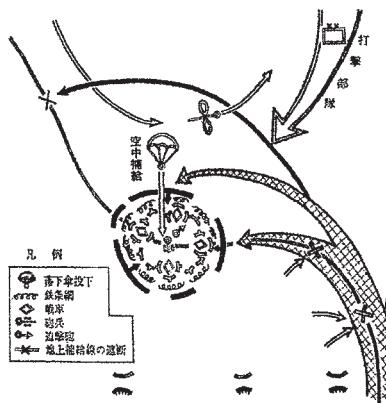


図3 英印軍の立体防御戦法

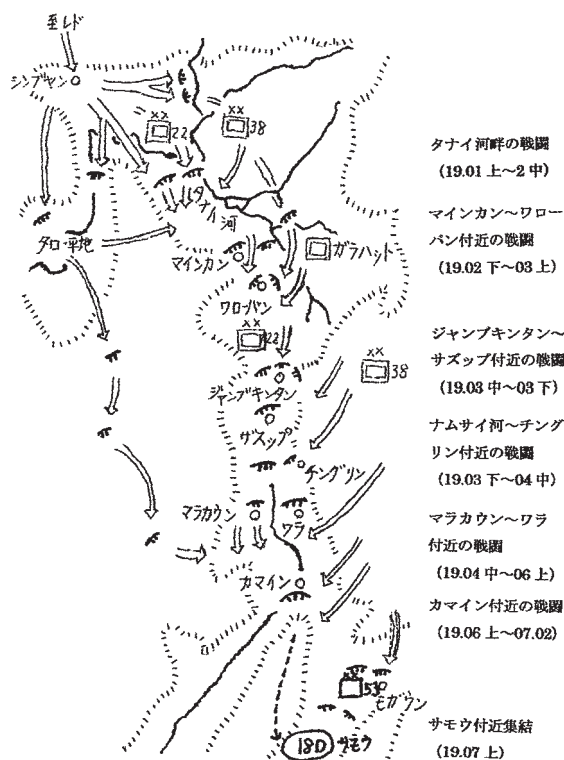


図4 フーコン作戦 (第18師団の遅滞作戦)

命的な難点があるとして、この作戦計画に反対した。

しかしながら、方面軍司令官は、第15軍司令官の積極的意志を尊重し、認可の方向で上級司令部に働き掛けるよう指導し、18年8月初旬には、大本営からインパール作戦の準備指示があり、8月12日には、方面軍の作戦準備要綱が示達され、準備が本格化することとなった。方面軍の作戦準備要綱の骨子は、次のとおりである。

① 主作戦正面

第15軍は、重点をチンドウイン西方地区に保持しつつ、インパールに向け攻勢をとり、なるべく我に近い地帯において英軍の捕捉撃滅を図り、爾後国境付近所在の英軍を撃破したる後、インパール付近の策源を覆滅する。

② 持久正面

○ 怒江正面は、第56師団をもって保山、蠻岡(ばんこう)の線以西の地区において持久

○ 北緬方面は、第18師団をもって国境以内において持久

○ アキャブ方面は、ブチドン、モンドウ付近を確保して英印軍の反攻を

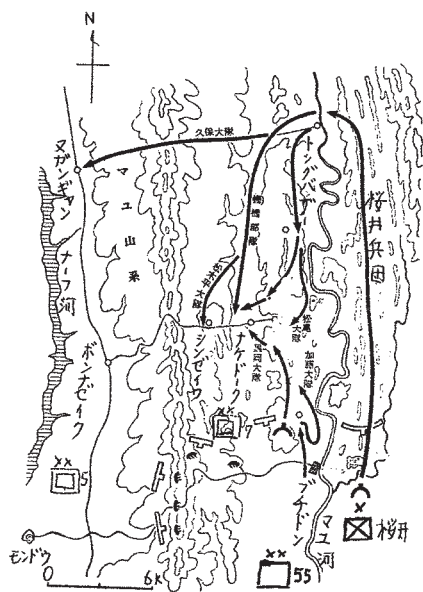


図5 第2次アキャブ作戦 (桜井兵団の突破〜包囲)

撃破するとともに、上陸企図を撃破してアキャブ付近及びボロンガ島を確保

以上のように、爾後の持久正面の作戦は、インパール作戦を中心に策定されることとなった。

4 怒江作戦 (昭和18年10月中旬〜11月中旬)

雲南正面でも重慶軍2個師団の活動が活発化してきたため、方面軍はインパール作戦の安全を期して、第56師団に対し、この敵の撃破を命じた。

師団は、10月13日に攻撃を開始し、11月中旬までに雲南軍を撃破して怒江の線に進出し、雲南軍の機先を制することに成功した。

5 フーコン作戦 (昭和18年10月10日)

この正面担当でインパール作戦の側背援護の任務を付与されている第18師団(長・田中将)は、当初米支軍の隘路進出時の弱点に乘じ、攻勢により作戦目的を達成しようとしたが、インパール作戦への影響を考慮し、遅滞作戦により作戦目的を達成することに決し、図4のよううにタナイ河畔、図4のよううにタナイ河畔の百数十kmの縦深地域を利用して約8カ月にわたる持久を達成し、インパール作戦の側背

19年6月)とウインゲート旅団侵入対処

新援蒋ルート(インドアッサム州レドゥーフーコン谷地〜ミートキーナ〜昆明道)建設のため、インドアッサム州を拠点とする米支軍のインド遠征軍(司令官ステイルウェル米陸軍中将、米製装備の新編第1軍団(2個師団基幹)と米ガラハット部隊の混成部隊)は、18年10月中旬以降フーコン河谷正面で攻勢を開始した。

援護の任務を達成した。

この攻撃に連携して、19年3月5日には、ウィングート旅団の空挺部隊約9000人がグライダーで、北部ビルマのマンドレーミートキーナ間に侵入し、至る所に円陣拠点を構成してビルマ北部の我が軍の行動を妨害した。

この敵の撃破のため、各方面から多くの部隊が急派されたが、統一する指揮組織が欠けていたため、各個の戦いとなり、ほとんどの攻撃は頓挫した。

この状況を憂慮し、19年4月8日、北部ビルマの部隊を統括指揮する第33軍司令部(司令官本多中将)の新設が下令され、4月29日、ラングーンで編成完結、フーコン正面担当の第18師団

と、雲南正面担当の第56師団を指揮下に入れた。

また、4月29日には第53師団(長・河野中将)が増強され、この部隊が空挺部隊の掃討に当たり、小康を保つことができた。

6 第2次アキャブ作戦

ビルマ南西正面には、18年9月下旬に第54師団が内地から増強され、第55師団の南方に展開した。

第1次アキャブ作戦で英印軍に壊滅的打撃を与え、国境以西に後退させた第55師団は、インパール作戦の準備に際し「ブチドン・モンドウの線を確保して英印軍の反攻を撃破する」との任務を付与され、ブチドン・モンドウ地域に堅固な陣地を構築しつつあった。

しかしながら、18年10月23日の人事異動で古閑師団長が転出し、新たに花

谷中将が着任すると、状況が一変した。

新師団長は、アキャブ正面で十分な牽制効果を収め、インパール作戦に寄与するためには、果敢な牽制作戦を実施し、当面の英印軍に殲滅的打撃を与えることが必要と判断し、方面軍司令官に意見具申をした。この構想は、方面軍の希望と一致し、師団の防勢作戦は、果敢な攻勢作戦に変更されることとなった。

昭和19年1月下旬には、アキャブ正面を統括する第28軍司令部(司令官櫻井中将)が新編され、第54師団に続いて進出予定の第2師団(ガダルカナルで壊滅的損害を受け、比島、シンガポールで戦力回復した)をもその隷下に入れた。

第55師団は、認可された案に基づき攻勢計画を策定し、2月1日、次のような攻撃命令(要旨)を下達した。

① 師団は2月3日夜、攻撃を開始する。

② 桜井兵団(歩兵団長桜井少将指揮の師団主力)は、マユ河左岸地区の敵陣を突破してトングバザー方向に突進し、所在の敵を撃破したる後、マユ河右岸地区の敵を背後より攻撃し、ブチドン北方の敵を撃破する。

③ 土井部隊(ブチドン陣地守備大隊)は、現在地において当面の敵を協力撃破する。

第55師団の突破・包囲までは予期のとおり進捗し、図6のように英印軍第7師団主力をシンゼイワ盆地に包囲した。

英印軍は、第1次アキャブ作戦の敗因分析の結果考案された円筒陣地の新戦法に基づき、包囲され、退路を遮断されても後退せず、シンゼイワ盆地に戦車の火力と鉄条網の障害を巧妙に組織化した堅固な陣地を構築するとも

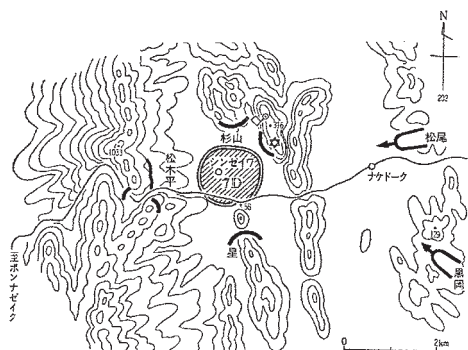


図6 シンゼイワ盆地の包囲態勢

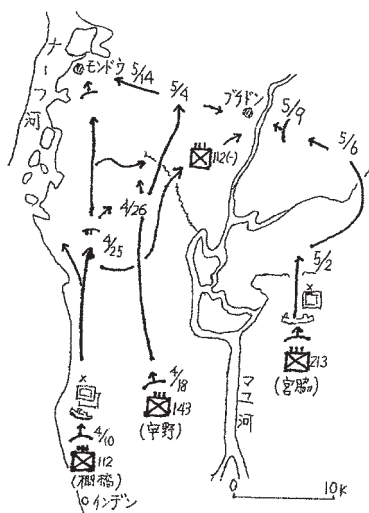


図7 第2次アキャブ作戦(第55師団の攻勢転移)

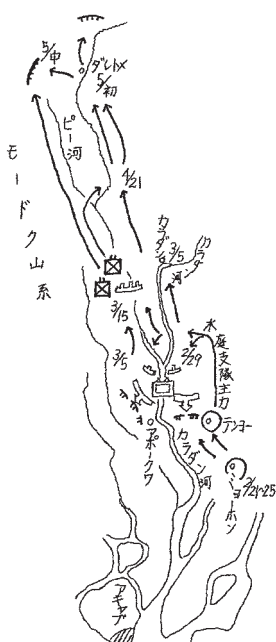


図8 カラダン河谷の戦闘

に、空輸補給により陣地を固守した。

桜井兵団は、2月11～16日の間、数次にわたり夜間攻撃を実施したが、その都度、照明弾により昼間化された状況下での白兵突撃を余儀なくされ、陣地の阻止火力により撃退され、損耗を累積した。

20日頃には、主力聯隊の人員は当初の2200名から400名以下にまで減じていたという。

また、糧食、弾薬も底をつき、攻撃部隊の戦意は著しく低下して、戦力の限界に達していた。

24日には、主力聯隊が認可を受けることなく撤退を開始し、兵団主力もこれに続き、26日には、師団も作戦中止の命令を発して後退を開始し、28日には、作戦開始前の態勢に復した。

英印軍は、後退する部隊に追尾して

南下し、モンドウーブチドン北側の陣地に対し猛攻を加えた。

この地域の担当を命じられた桜井歩兵団長は、防御と果敢な攻撃により敵の阻止を図るが、陣地は逐次蚕食されて危機的状況に陥った。

しかしながら、3月8日からインパール作戦が始まったため、英印軍は攻撃中の歴戦の第5、第7の2個師団をインパール正面に転用するため、第26、第36師団と交代させた。

第55師団長は、この機に乗じ、各部隊に攻勢転移を命じた。

師団の攻勢は、図7のように進展し、5月5日頃には、モンドウーブチドンの陣地線を回復、雨季の対陣に入ることができたが、この攻勢により師団の戦力は著しく低下した。

一方、マ云山系沿いの2個師団の攻

撃に連携して、カラダン河谷正面から

も英印軍1個師団が18年末頃から南下を開始し、シンゼイワ盆地で包囲中の部隊の側背に脅威を与えたため、第18軍司令官は、この地域を軍直轄とし、アキヤブを守備中の第54師団の木庭支隊（歩兵第111聯隊基幹）にこの敵の撃破を命じた。

支隊は、図8のようにカラダン河谷に急進し、ラムドウ、次いでヘタボウ付近で敵部隊を撃破、引き続き戦果を拡張し、敵部隊を印緬国境以北に撃退して、第55師団の側背を安全にした。

第2次アキヤブ作戦は、攻勢によりできるだけ多くの敵を持久正面に牽制拘束し、インパール作戦に寄与することを目的に実施された攻勢作戦であり、当初は英印軍総予備の2個師団を牽制拘束したが、シンゼイワ盆地での

包囲殲滅が、早期に失敗に帰したため、インパール作戦開始時期には牽制効果を喪失し、インパール作戦開始初期に2個師団の転用を許した。

7 おわりに

インパール作戦開始前には、フーコン正面からは米支軍が、雲南正面からは米式装備で新編された重慶軍の雲南遠征軍が、アキヤブ正面からは英印軍が反攻に転じ、攻勢圧力を強めつつあり、ビルマ全般の戦局は行き詰まりを見せていた。

この難局を打開するには、インパール作戦で快勝を納めるしかないという霧閉気が方面軍内に充満していた。

インパール作戦は、このような情勢下で、昭和19年3月8日から開始されたが、その細部については、次号で紹介することとする。

自衛隊山岳連盟が慰霊登山

自衛隊山岳連盟（柚木文夫会長）は、登山を愛好する陸海空自衛隊の現役隊員・OBらで構成する団体である。会員相互の登山に関する情報交換のほか、定期的な合宿登山、機に応じての海外遠征登山などが主な活動である。

当自衛隊山岳連盟において、終戦70

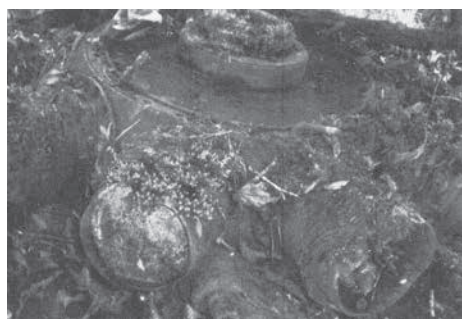
周年を記念する戦没者慰霊登山の実施が会員の話題となり、丹沢山系に今も残存する旧軍航空機墜落現場を訪ねる慰霊登山が計画されるに至った。そして、終戦70周年の10月31日、11月1日の両日、7名の連盟会員が、険路をかき分けて、米軍機との戦闘で活躍した海軍機「銀河」の墜落現場に到達し、戦没搭乗員の在りし日に思いを馳せつつ、感銘深く慰霊行事を実施した。

慰霊登山本番に先立ち、練達の会員数名による偵察行が、9～10月の間に数回行われ、かねて山仲間を取り沙汰された断片情報どおり、丹沢山東面キユウハ沢の標高800m地点、及び蛭ヶ岳東面中ノ沢の標高1300m地点の二箇所、旧海軍の陸上爆撃機「銀河」と思われる機体の残骸を発見することに成功した。

本番の慰霊登山で二箇所の訪問は無

理との判断で、本番は蛭ヶ岳東面みの訪問に決し、10月31日～11月1日の計画で参加者を募ることとなった。新聞「朝雲」で連盟会員以外の自衛隊員にも参加を呼び掛けたが、若干の問い合わせがあったものの、実際の応募者はなく、参加者は会長以下7名の連盟会員のみによる登山となった。

会員は初日、神奈川県清川村の塩水橋を出発、霧に包まれたものの無事、



発見された星型エンジン「誉」



自衛隊山岳連盟が制作した慰霊碑
「銀河」のエンジンの傍らに建てられた



「銀河」に搭載されていたエンジンを前に慰霊
の言葉を述べる柚木文夫会長

丹沢山頂の山小屋「みやま山荘」に到着した。翌日は天候も回復し、午前6時過ぎに山小屋を出発、8時過ぎに墜落現場を見下ろす蛭ヶ岳山麓に差し掛かった。先導する連盟事務局長の河内正樹準陸尉が登山道を離れ、一行は最大傾斜42度の道なき道の斜面に足を踏み入れた。

途中、航空機の一部と見られるジュラルミンの破片が見付かった。丹沢山系上空では戦時中、米軍機を迎撃した多くの航空機が行方を絶っており、苔に覆われた残骸を目にする度に、重々しい「気」を感じずにはいられなかった。

所々、朽ちそうなロープが急斜面を縫うように張られていた。これは34年

前の昭和56年8月、「墜落機の破片と人骨を発見」という登山者からの通報を受け、神奈川県警約60人の捜索隊が現場検証を行った際に張られたものという。その際に遺骨と共に発見された航空機のタイヤの文字などから、海軍陸上爆撃機「銀河」と推定されたとのことである。頼りないロープにつかまり、冷や汗をかきながら、山中深くに眠る同機のエンジンを目指した。

下ること30分、先導する河内准尉が「見付からないぞ」と頭をかかえた。苔と落ち葉に埋もれ、落石の散乱する現場での捜索は困難を極めた。参加した7名が散開し目を凝らしての捜索。しばらくして「あった!」と後方から声が。エンジンは土と苔に埋もれ、ピストン部分のみが僅かに顔をのぞかせていたが、まぎれもなく旧海軍機「銀河」で使用された星型エンジン「誉」

だった。

ザックを下ろし、携行した、慰霊の思いを記した木製の碑をエンジンの傍らに建て、酒と大福餅のお供え物を供え、一同脱帽整列して、8時50分、慰霊式開始。柚木会長が進み出て「慰霊の言葉」を読み上げ、参加者一同がしんばしの黙祷を捧げた。

会長の「今日の平和と繁栄は、七十年前の皆様方の生命を賭しての御奉公が礎石となつて築かれたものであることを、私たちは決して忘れません。私も自衛隊員は、皆様方の尊い御遺志を引き継ぎ、輝かしい伝統に恥じないよう、国防の任務に邁進してまいります」との慰霊の言葉(後掲)が胸に沁みだ。木漏れ日がエンジンを照らし、黒く光つていた。

式が終

わると厳肅な空気が和み、「胸のつかえの取れた」会員は、ホッとした表情を見せた。

「自衛隊記念日の11月1日に慰霊ができたことは意義深い。これから丹沢に登山してこの地を訪れる人は、英霊を悼む気持ちを忘れずに来てほしい」と話す河内准尉。柚木会長は「我々は旧軍の伝統を忘れることなく引き継いでいかねばならない。その覚悟を改めて確認させてくれた登山だった」と語った。

(注・本稿は、朝雲新聞社刊「朝雲」第3185号(平成27年11月26日)に掲載された記事に、一部修正を加え、お許しを得て転載したものである。)

慰霊の言葉

大東亜戦争が終わって七十年目の本日、私も自衛隊山岳連盟の有志が相集い、大東亜戦争を戦い愛機と共に任務に斃れた英霊の御霊の宿るこの地、かつまた、人の訪れることの絶えてなかったこの山間の地を、この度ようやく訪ねることができました。この所縁の地に立ち、この地に散華された英霊の御霊に謹んで慰霊の言葉を捧げます。

過ぐる大東亜戦争においては、この地に斃れた皆様を始め、多く

の皆様が、祖国と同胞の安寧を願って、苛烈な戦闘に身を投じ、勇戦敢闘して散華されました。あれから七十年

という長い年月が経過しましたが、愛する家族を残して任務に斃れた皆様のご無念と、一家の柱を失い、後に残された御遺族の悲痛に思いを致すとき、今なお、万感胸に迫るものがあります。

今日、我が国、我が国民は、世界でも屈指の豊かで平和な生活を享受しております。この平和と繁栄こそ、七十年前の皆様方の、生命を賭しての滅私奉公が礎石となつて築かれたものであることを、私たちは決して忘れません。

また、私も自衛隊員は、皆様方の尊い御遺志を引き継ぎ、皆様方が残された輝かしい伝統に恥じないよう、国防の任務に邁進しております。皆様方

の指導きのお蔭で、この国の七十年に及ぶ平和の継続に、私どもの任務遂行が、与つて力があつたことを、皆様方に胸を張つてご報告申し上げることに幸せを、改めて胸に噛み締めております。

戦後七十年の節目の年、英霊の御霊の鎮座しますこの地に立ち、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれた皆様の勇氣と献身を改めて思い起こし、先人から託されたこの美しい国の守り

に、加えて先人から引き継いだ自衛隊の更なる精強化に、これまでも増して一意邁進すべく、覚悟を新たにするものであります。

ここに、御英霊散華の地にあって、御霊前に額ずき、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、どうか私どもに、なお一層の御加護とご導きを賜りますことを希つて、慰霊の言葉といたします。

平成二十七年十一月一日
自衛隊山岳連盟会員一同を
代表して
会長 柚木 文夫

ガダルカナル島遺骨収容活動報告

全国ソロモン会

派遣隊長 崎津 寛光

一 はじめに

全国ソロモン会では、平成23年から毎年、ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動を、特定非営利活動法人JYMA日本青年遺骨収集団と協同で実施し、平成27年度は、5回目の自主派遣を無事終了することができました。

この間、平成26年度の活動において

は、それまで収容した御遺骨137柱が、海上自衛隊練習艦隊によつて日本への帰還が果たされ、感無量でありました。また、平成25年度からは、靖國神社に、神職の御差遣を正式にお願いしております。

今次派遣では、108柱の御遺骨を収容・受領して茶毘に付し、神式による慰霊祭と仏式による慰霊法要を執り行い、9月14日、厚生労働省応急派遣団の手により本邦に送還させていただくことができました。

時あたかも戦後70年、戦友遺族会の方々が、亡き友への切実な思いを胸に、連綿と実施されてきた戦没者の遺

骨収容事業を、国の責務として実施しようとする法案が整備され、従来の方法を超え、国の事業として、対象地域、規模、期間を飛躍的に充実して諸施策を実行するための諸準備が行われようとしております。

本稿は、当会がこれまで行ってきた活動、なかんずく、平成27年度の活動を中心に、準備から実施に至る一連の行動について、今後、国により大規模に実施されるであろう当該事業が、より実り多いものとなることを願つて、その一端を紹介するものであります。

二 自主派遣隊の構成員

1 日本からの参加隊員

ア 国内における応募

隊員は、自主的な奉仕の精神をもつて、慰霊と遺骨収容活動に取り組むという意志を持っていることが重要であり、インターネット等により募集を行い、面談の上、応募者の中から適任者（今年度は17名）を選考した。

イ 適任者の選考

選考に当たっては、派遣先の地域の状況、現地での自活行動（天幕野営）の必要性、遺骨収容活動における重労働の程度等を考慮し、過去複数回の参

加経験を有する者が半数以上となるよう、考慮した。

年齢構成は、20代から60代まで幅広い世代が参加し、若年者が体力で年配者を支え、年配者が知識や経験を若年者に伝えるという、お互いにその力を補完しながら活動できることを狙いとした。

参加者の職業等は、大学生、会社員、会社経営者、ジャーナリスト、僧侶、神職、大学教員、自衛官OBなど多様である。このことが、後で述べる現地での活動において、統制が維持できるための事前訓練、及び命令・指示に従うことができる形而上下の各種手段・方法が重要となってくる。

2 現地参加隊員

収容活動を行う地域の地理、過去の歴史（戦闘状況）、言語、補給品の管理、衛生等に、ある程度の知識を有する人々を、派遣隊員として迎えることは必要不可欠である。

在留邦人、ボランティアであるJICA青年海外協力隊員、そして今回も、収容活動を行う地域の地権者であるバラナ村の人々をソロモン隊参加隊員として迎えることができたが、現地の事情に精通する彼らの存在が極めて重要である。

三 事前準備訓練・研修

派遣隊の構成員は、遺骨収容活動予定地についての戦史への理解度、遺骨収容活動の経験、年齢等、いわゆる初心者から熟練者まで、種々の人の集まりである。

一方、収容活動を予定する場所は、日本の風土・気象・人種・文化とは著しく異なる特性を有しており、油断をすると、収容活動の成果のみならず、安全管理、衛生管理上、極めて重大な結果を招くことになりかねない。

このような活動環境の特性を考慮し、当会では、第1次派遣当時から、志願隊員への事前準備訓練・研修、面談を実施し、活動に当たり、統制の取れた行動を行い得る精神的・肉体的鍛錬を積み上げ、全員が事故なく、安全に帰国できる諸準備を行っている。

本訓練は、特に若い学生達が慣れない団体行動上、順守すべきことを身体で覚えてもらうことにより、現地での活動が円滑に実行できる素地を練成する絶好の機会と思料する。

1 事前訓練

東京・奥多摩において、登山訓練等を実施した。訓練は、派遣前に2回、各回2～3日の訓練日程で毎年行っている。

主要な訓練の狙いは次のとおりである。

- 山岳・不整地における重量物の運搬（山地登坂、下山）
- 小グループ（3～5人）によるチームワーク（分派活動の訓練）
- 天幕展張、野外炊事、野営時の行動
- 夜間の行動（夜間行進訓練）
- 無線交信訓練、通伝訓練
- 不測事態対応行動（傷病者の保護、救助要領）

本訓練を通じ、身体的な不適格者、団体行動になじめない者が判明した場合には、派遣辞退をお願いする場合も考慮しなければならない。

2 研修

派遣日程、行動の概要、及び戦史については、大東亜戦争の開戦の経緯、諸作戦の経過、なかなしく、ガダルカナル島において展開された作戦について、戦史を繙き、戦没者の慰霊顕彰に思いが深まることを願って行っている。また、東京消防庁の実施する上級救命講習を受講することも志願隊員の義務としている。

四 派遣隊員の編成、任務

1 小隊編成

現地での活動が整齊かつ効率よく実施され、かつ安全管理の徹底を図るた

め、小隊を編成し、派遣隊長の命令・指示が、個々の隊員にまで徹底され、やるべきこと、やってはいけないことが厳守されるよう、態勢を確立した。

派遣隊の編成は、隊長―副隊長（1名）―小隊長（3名）―3個小隊（3名×5名/小隊）で、小隊内で分派を想定し、各小隊に班長を指名した。

2 派遣団の運営・管理組織

遺骨収容活動では、搜索・収容活動が効率的に実施できるための運営・管理機能が必要である。

これらの機能については、遺骨収容活動の小隊編成とは別に、次のような機能・役割を有する担当科を編成し、各科に隊員を振り分けた。

各科の任務は、以下のとおりである。

ア 法祭科

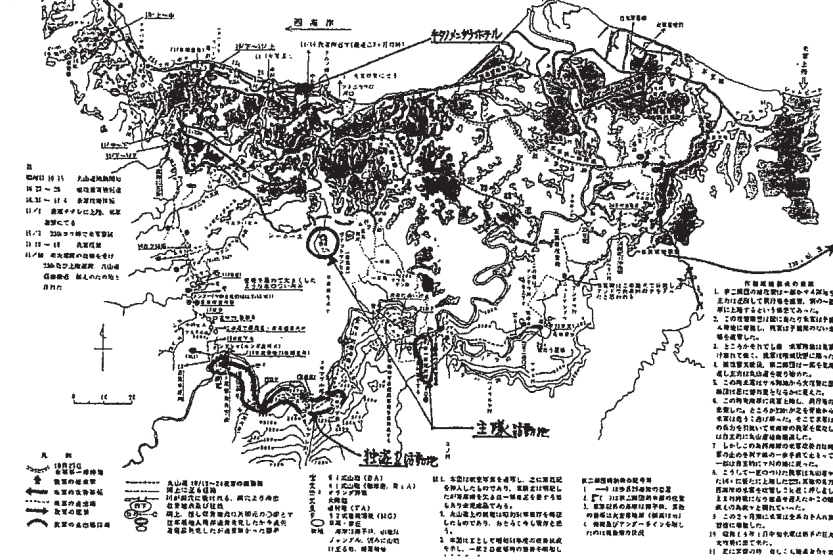
- ① 発見現場、野営地、焼骨式等での慰霊祭・慰霊法要・拝礼・読経
- ② 御供物、祭具・仏具管理
- ③ 祭壇設置（野営地の供物を含む）、隊旗掲揚・管理
- ④ 御遺骨収納袋の管理（各小隊への交付を含む）

イ 運用科

- ① 通信アンテナ設営
- ② 発見現場、慰霊、拝礼等全活動状況の記録写真・映像撮影
- ③ 残存遺骨情報記録

④ 行程時間記録	活動の協力を得た。	3 在ソロモン諸島国 日本大使館―大使、書記官	六 現地常駐員の活動
⑤ 発見現場におけるテープ展張、派遣隊貼紙の管理・貼付	なお、現地における活動の指示・統制系統は、日本隊の派遣隊長の指揮下にソロモン隊の村長以下を入れて協力を仰ぎ、村民は各小隊に振り分けて活動した。ソロモン隊の小隊長は、豊富な遺骨収容活動経験を積んでいる者とした。	○ 活動期間、活動地域、活動内容―計画の概要、特に活動地域、行動経路については、地図に記載し、提出	ガダルカナル島ホニアラにあるキタノメンダナホテルには、同ホテルの警備課長として、全国ソロモン会役員である西富謙太郎氏が駐在している。
⑥ 御遺骨収納袋の管理（番号、収容場所の記入管理）	遺骨収容活動の実施に当たっては、関係行政機関を始め、多くの民間団体・個人から物心両面の支援・協力が得られることが必要である。	○ 編成・装備等―派遣隊の装備、特に糧食・水・医薬品等の準備状況、緊急連絡手段（無線機、衛星携帯電話）	彼は、通常、ホテル従業員として勤務する傍ら、余暇時間（休日、休暇）を活用して、当会の遺骨収集自主派遣に関わる情報収集、調整、連絡、現地ソロモン人との友好親善に係る広範な職務を精力的にこなしている。
⑦ 派遣隊装備品管理（掘削資機材、生活関連物資）・交付、必要装備品の現地調達	このため、今次派遣に当たっても、次のような関係機関、団体、個人に対し、活動予定等について、事前に十分な説明を行い、本事業の実施について、直接・間接の支援・協力をお願いした。	4 ソロモン諸島国 特命大使、現地協力者（日本人）	特に、彼が現地ソロモン人から得た遺骨収集に必要な情報は、その活動に当たり、極めて重要なものであり、また、その情報を得るためには、長期にわたり、現地人との友好親善を築いてきたからこそ、可能になったことを銘記すべきである。
⑧ 電源（電池、常夜灯）の管理、交付	五 事前調整・支援要請	5 ホニアラ中央病院	彼の活動状況は次のとおりである。
⑨ GPS管理・運用	遺骨収容活動の実施に当たっては、関係行政機関を始め、多くの民間団体・個人から物心両面の支援・協力が得られることが必要である。	6 ホニアラ市警察署	○ キタノメンダナホテルとの調整
① 衛生袋管理（外傷手当、各種薬品処方、防虫（蚊）対策）、石灰管理	1 バラナ村―村長	7 キタノメンダナホテル―総支配人	○ 緊急時における連絡・対応についての要請
② 飲料交付（ポリタンク、ペットボトル、クーラーバッグ管理）	○ 派遣隊の行動―活動地域、派遣隊の編成（各小隊から抽出した2個班が個別行動）	8 JICA―所長、調整員	○ 現地人の遺骨情報の取得、日本将兵の行動・埋葬地に係る情報収集
③ 隊員健康管理表記入、マラリア予防薬服用管理	○ 現地参加隊員―村民からの参加者数（25名雇用）、雇用賃金（活動地域別、職務別（班長、一般）	○ 緊急・不測事態発生時の支援についての協力依頼	○ 現地住民との友好親善関係の醸成、派遣時の協力者応募の事前要請
エ 補給料	2 コカンボナ村―村長	○ 焼骨式の実施に伴う協力要請	○ 遺骨収容実行動予定地域の地誌、特に、道路状況、アクセス経路の確
① 配食（日本隊、ソロモン隊の食数確認）	3 現地バラナ村住民組織	○ 緊急時、不測事態発生時の支援についての協力依頼	○ 遺骨収容実行動予定地域の地誌、特に、道路状況、アクセス経路の確
② 糧食管理、交付（不良品の把握）、糧食食材の現地調達	今回の収容活動に当たっては、現地バラナ村から村民25名の参加を得た。彼らは各グループ3～5名の3個グループを編成し、各小隊長の指揮下に入り、前掲の各小隊の活動地域において、収容予定地への進入路の啓開、誘導、搜索現場での雑木伐採、遺骨収容	○ 緊急・不測事態発生時の支援についての協力依頼	○ 遺骨収容実行動予定地域の地誌、特に、道路状況、アクセス経路の確
③ 現地バラナ村住民組織	○ 焼骨式の実施に伴う協力要請	○ 緊急・不測事態発生時の支援についての協力依頼	○ 遺骨収容実行動予定地域の地誌、特に、道路状況、アクセス経路の確
導、搜索現場での雑木伐採、遺骨収容	○ 緊急・不測事態発生時の支援についての協力依頼	○ 緊急・不測事態発生時の支援についての協力依頼	○ 遺骨収容実行動予定地域の地誌、特に、道路状況、アクセス経路の確

加島2 D 総攻撃前後の戦闘概況航空写真要図の集成図
(兼勇川含まず丸山道収骨概況要図)



認、宿営適地の確保（地権者との調整）
○ 本隊の受け入れ
○ 輸送（悪路、泥濘地における車両による移動、連絡を含む）

七 戦没者遺骨に関する情報収集

遺骨収容活動の実施に当たり、その

搜索地域、収容活動地域に関する具体的な情報は、極めて重要であり、確度の高い情報をいかにして収集し、その情報に基づき、現地を踏破できなければ、時間と経費、多くの人々の労力が無駄になる。

情報収集に

は、現地の地形・地物（山地・丘陵、道路、河川、人工物等）が記載された地図が必要である。

当会では、昭和51年当時作成された航空写真を透写したものを利用している。この地図上に、戦史文

献、戦友会員の記憶、及び現地住民と当会駐在員から得た情報を展開し、遺骨収集の実働地域を選定している。

今後、厚生労働省の計画で実施される遺骨収集には、先ず、現在の道路状況と地名が正確に描写された地図を準備する必要がある。

その図上に、戦史文献、戦友会員、現地住民、交戦国の保管文書等（戦闘詳報・戦闘要報、戦闘日誌）を通じて得た日本軍の行動を克明に記録し、活動計画、収集記録を整理していくことになる。

八 遺骨収容活動

1 丸山道第一野戦病院跡地

進入は比較的容易な地域であり、主力を投入して搜索したが、今次隊では骨片のみの発見であった。

昨年までの活動で、収容すべき遺骨は、ほぼ収容できたものと判断される。

2 丸山道タンブレロ〜コロブ

アウステン山から急斜面を下り、ルンガ河を渡河した丸山道の奥地であり、雨天時には大変な悪路になり、四駆車の運転には高度の操縦技術が必要である。急斜面の移動には、重量物を担送しての移動は困難であり、軽装備の小隊を投入した。当隊は特に体力、

経験に優れた隊員2名（崎津隊長外1名）、ソロモン人隊員4名（ウイリ村長を含む）及び報道班で独立小隊を編成し、野営の上、5日間の搜索、収容活動を実施した。

奥地であることから、盗難等の恐れがなく、活動中及び夜間就寝中の安全管理要員による監視・警戒措置は行わなかった。

なお、危害を及ぼす恐れのある野生動物はいない。

タンブレロ地区は、丸山道における最奥地であり、無線交信も難しく、地形は、3年前とは大きく変化していたが、偶然にも2柱の御遺骨を収容できた。無線交信が困難な地域における警笛による相互連絡は、極めて有効である。

コロブ地区も、地形急峻で、密林障害が大である。途中、大スコールに見舞われ、早期に転進し、全員滑落等の怪我もなく、帰路の計画地点まで無事到着した。当該地区では、4柱の御遺骨を収容した。

密林地区における、ソロモン人隊の方向感覚、行動能力は、極めて優れており、驚嘆させられる。

3 ベラバウ地区

急斜面の危険を伴う地域で、経験豊かな小隊長の下に、日本隊3個小隊及びソロモン隊19名をもって大規模搜索



野戦病院跡地への進入



御遺骨収容現地での読経供養



タナビーチでの遺骨収容活動

を行ったが、遺留品と骨片の発見に留まった。

4 タナビーチ地区

日本軍の撤退路であるこの地域は、全体として砂地であり、穴を掘り排土をしても、砂利が崩れ落ち、ビニールシートで保護しながらの収容活動となった。全身御遺骨が2柱発見された。

九 米軍遺骨収集団の活動

今次派遣において、米軍の遺骨収集団と現地遭遇し、彼らの搜索活動の

様子を見学することができた。

米側の搜索地域は、全て密林を伐採し、現地人約50名を雇用、考古学者、地質学者立ち会いの下、米軍人の指揮により、広大な地域を搜索していた。現地には、コンパネを敷き詰めた立派な小屋が5棟建てられており、離れた水源地から水を動力ポンプで引き上げて洗骨する小屋、骨片や遺留品を見逃さないため、御遺骨をふるいにかけるための小屋、資機材置場、休憩所、トイレ等が完備されていた。

急斜面に木材で階段を造り、体力の強弱に拘わらず誰でも行動できるよう施設が整備されていた。

軍人、戦没者に対する国及び国民の姿勢、考え方が、我が国と大きな隔たがあり、遺骨収容をボランティアでやらなければならない現実には、早急に改革することが急務であることを痛感した。

今後、遺骨収集事業推進法が制定され、国としての施策が着実に具体化されることを期待したい。

一〇 活動に当たって留意すべき事項

日本と大きく環境が異なる土地、不慣れた山地・錯雑地での活動、言語・習慣・宗教が異なる場所での活動であることを考慮し、隊員の健康・安全に万全の処置を講ずることを考慮し、特に留意した事項は次のとおりである。

1 マラリア予防

マラリア予防薬（ドキシサイクリン）の服用の義務付け（同予防薬は、現地薬局にて購入）

2 服装、礼式

ア 出発から帰国まで、全隊員が指定の制服を着用（名札の着用）、現地での活動に当たっては、肌を露出させない服装を厳守

イ 礼式の徹底（活動開始・終了時の整列、拝礼、敬礼、復命・復唱）

ウ 行動面での統制

○ 夜間活動の禁止

○ 単独行動の禁止

3 現地ソロモン人との友好関係の醸成

収容活動の実施に当たっては、現地のソロモン人の協力は、不可欠である。彼らが持つ密林内での行動能力、遺骨収容に関する独特の嗅覚等の技術・体力を十二分に活用できるよう、また、相互の意思疎通が円滑となるよう、物心両面の心遣いが重要である。

日本隊、ソロモン隊共に、全員が名札を装着し、積極的に声を掛け、食事もできる限り同じ物を一緒に食べる等の行動は、友好親善の中で活動するに極めて有効である（対する米側派遣団はこれをしていない）。

また、現地に駐在している隊員が、彼らとの友好を深めるため、機会を求めて一緒に過ごす時間を多くするとともに、遺骨収容に関連した情報の収集に東奔西走する等、日常的な活動から信頼を得ることが極めて有効であり、必要不可欠である。

4 食事・給水

ア 野営実施隊の食事
全体として、軽量、少量を追求、朝食・夕食は、現地ソロモン人の好みを考慮、昼食は、簡便な携行食イ 給水

現地ミネラルウォーター精製会社から、タンクごと購入（水質による隊員の腹痛等は皆無）

ウ 現地調達物資

ツナ缶、フルーツ缶、煙草、米、袋麺、調味料、ビスケット等スナック菓子、ミネラルウォーター、インスタントコーヒー、トイレ用石灰

5 無線機

現地滞在間、人員の確認、安全管理、情報共有のため、派遣隊内小隊、隊員

相互の連絡のため、全隊員が保持し、次のような無線機を使用した。

なお、長・中距離用無線機の使用周波数については、事前に申請して現地国通信局の使用許可を得ておく必要がある。

○ 長距離 VHF15380 MHz

（10式無線機） 幹部用

○ 中長距離 UHF42050 MHz

（12式無線機） 小隊長用

○ 中距離 UHF62550 MHz

（9式無線機） ソロモン隊員用

○ 短距離 UHF42050 MHz

（特定小電力無線機） 一般隊員用

6 GPSロガー

遺骨収容場所を明確に記録するため、GPSロガーを用いた。

最近では、廉価で簡便な機材が市販されており、遺骨発見地点や出発点・帰着点でボタンを押すと、その場所が座標で記録されるものである。これをインターネット上のグーグルマップに重ねれば、どの地点で収容し、また行進したかを地図上で読み取ることができようになる。当隊では、本機の知識がある運用長がこれを管理しているが、隊員は研修時にこの運用方法を習得できれば、今後の活動に有益となる。廉価なものであれば、1台5千円程度であり、今後も派遣隊員や現地駐

在員の必須装備品である。

一一 結び

大東亜戦争終戦70年を迎えた今もお、ビスマーク・ソロモン諸島における戦没者11万8700柱（海没者を含む）のうち収容帰還は、3万44柱であり、ガダルカナル島においても2万2000柱の戦没者のうち、本邦帰還は1万5281柱に過ぎません（平成28年1月 厚生労働省資料）。

戦没者遺骨収容帰還事業が、ようやく国の施策として本格的に実施されようとしています。従来の要領を抜本的に見直し、未だ海外の地に眠っておられる御遺骨を、一体でも多く、早期にお迎えできるよう、願って止みません。

同時に我々は、その御遺骨は「人」であり、慰霊が伴った遺骨収容活動を今後も継続、推進していかない限り、「モノ」としての活動に成り下がってしまします。爾後、当該活動は、この点を銘記し、「してやる」ということではなく、「させて頂く」という奉仕の精神をもって臨まねばならないと痛感しております。

※当該活動の模様は、インターネットで、ユーチューブから、『ガダルカナル島第5次』で検索いただくとご覧になれます。

事務局からの報告等

一 理事会の開催

3月4日（金）、平成27年度第2回通常理事会が、当協議会会議室において開催された。

会議においては、事務局からの提出議題について、熱心な討議が行われ、いずれも事務局案が、原案どおり承認された。

1 議案

① 平成28年度事業計画書及び同収支予算書

② 財産運用の執行方針及び計画案

③ 平成27年度下半期業務執行状況

2 出席者

理事11名中11名、及び監事2名が出席した。

二 慰霊祭等への参加状況

1 平成28年1月28日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、硫黄島戦没者遺骨帰還団の遺骨引渡式が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

2 平成28年2月22日、財団法人青葉園において、NPO法人国民保護協力会主催による山下奉文大将閣下慰

霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事外1名が参列した。

3 平成28年3月5日、靖國神社において、NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団主催による戦没者慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

4 平成28年3月26日、靖國神社において、(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会主催による第37回特攻隊合同慰霊祭が執り行われ、当協議会から岩田司朗常務理事が参列した。

三 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成27年度第4回派遣が平成28年1月13日から同月27日まで実施され、当協議会からの派遣団員として、航空自衛隊退職者団体「つばさ会」から2名が参加し、御遺骨の収容に献身されました。

収容作業は前回同様、気温摂氏60度以上、高温多湿の狭い洞窟内で行われ、体力の消耗が著しく、大変御苦勞されました。
お疲れ様でした。

四 ホームページアドレスの変更

当協議会のホームページアドレスは、レンタルサーバー先の変更に伴

い、「<http://ireikyoun.com>」に変更となりました。

新入会員名簿 (敬称略)

(平成27年12月1日～平成28年2月29日)

【賛助会員】 (五十音順)

正 本 禎 亮

会費納入のお願い

平成28年度の年会費納入にご協力をお願い申し上げます。

なお、本会報同封の払込取扱票は、賛助会員年会費納入並びに平成28年度合同慰霊祭参加申込み及び参加費納入を兼ねておりますので、ご確認の上、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「ご寄稿について」のお願い

当協議会では、広報誌「慰霊」を、年4回(一月、四月、七月、十月)発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。

ご寄稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協議会事務局に任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要な場合は、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協議会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖國神社遊就館内・地階

(公財)大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会事務局

電話 03-6380-8943

FAX 03-6380-8952

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、戦没者慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の当協議会会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)

年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別ご芳志の賛助会員)

年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)

年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する法人・団体)

年会費 一口一〇〇〇〇円
(一口以上)

協議会参加各団体の平成28年度慰霊行事予定 (情報入手分のみ)

(各団体が主催する慰霊行事を主とし、協賛行事は割愛しています。)

(年 月 日)	(時 間)	(場 所)	(慰 霊 行 事 名)
(公財) 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会	28・7・9 式典12時 直会13時30分	靖国神社 靖国会館	平成28年度大東亜戦争 全戦没者合同慰霊祭
(公財) 海原会	28・5・29 10時	陸自武器学校内・ 雄翔園二人像前	第49回予科練戦没者 慰霊祭
英霊にこたえる会	28・4・2 14時45分	靖国神社大村 益次郎像前	第32回靖国神社の桜の花の 下で「同期の桜」を歌う会
28・8・15	9時10分	靖国神社	第41回全国戦没者慰霊大祭
28・8・15	10時30分	靖国神社	第30回戦没者追悼中央国民 集会(共催・日本会議)
鹿児島偕行会	28・6・17 9時30分	靖国神社境内	鹿児島県沖縄戦没者慰霊祭
28・8・15	10時11分	鹿児島県護国神社	大東亜戦争戦没者慰霊祭
28・3・30	10時30分	鹿児島県護国神社	鹿児島戦没者墓地慰霊祭
旧戦友連	28・4・2 14時45分	靖国神社大村 益次郎像前	第32回靖国神社の桜の花の 下で「同期の桜」を歌う会
28・4・2	10時15分	靖国神社参集殿前	靖国神社社頭広報
通年(日曜日、祭日)	10時15分	靖国神社	昭和殉難法務死者追悼・ 年次法要(共催)
近畿偕行会	28・4・29 11時30分	高野山奥の院	パール博士顕彰碑建立19周年記念行事
28・9・14	14時17時	京都霊山護国神社	合同慰霊祭
熊本県偕行会	28・11・1 11時15分	熊本県護国神社	山下奉文大将慰霊祭
特定非営利活動法人国民保護協力会	29・2・23	青葉園	JYMA慰霊祭・活動報告会
特定非営利活動法人JYMA	29・3	靖国神社	ソロモン群島方面戦没者慰霊祭
全国ソロモン会	28・10・30 11時12時	靖国神社	
(年 月 日)	(時 間)	(場 所)	(慰 霊 行 事 名)
全国メレヨン会	28・4・7 11時14時		第47回全国メレヨン島戦没者追悼 慰霊祭
28・6・5	11時14時		メレヨン島北海道出身戦没者追悼 慰霊祭
28・10・30	11時14時		東京メレヨン会慰霊祭
全ビルマ会	28・11・3 10時	靖国神社	全ビルマ方面戦没者慰霊祭
ソ聯強制抑留戦友会	28・11・3 12時13時30分		第20回ソ聯抑留中死亡者鎮魂慰霊祭
筑後地区偕行会	28・8・15 10時12時	久留米市忠霊塔 山川招魂社	戦没者慰霊平和祈念祭 爆弾三勇士慰霊祭
29・2・22	10時12時		千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
(公財) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会	28・5・23 12時30分	千鳥ヶ淵戦没者墓苑	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
28・10・18	13時14時30分	千鳥ヶ淵戦没者墓苑	28年度秋季慰霊祭
東部ニューギニア戦友遺族会	28・4・5 12時15時	靖国神社	靖国神社永代神楽祭(年次総会)
(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会	28・9・22 14時16時30分		第65回特攻平和観音 年次法要
29・3	11時14時30分	世田谷山観音寺	第38回特攻隊戦没者 合同慰霊祭
ハワイ明治会	28・8・15 11時	盆法要	招魂慰霊祭
福岡県偕行会	28・10・4 15時16時30分	福岡県護国神社	福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭
福岡県偕行会	28・10・4 11時	福岡陸軍墓地	福岡陸軍墓地慰霊祭
姫路偕行会	28・8・16 11時	田中静老陸軍大将顕彰碑参拝	たつの市龍野公園
宮崎県偕行会	28・8・26 10時11時	宮崎県出身戦没者慰霊祭	宮崎県護国神社
山口県偕行会	28・11	山口県陸軍墓地	山口県陸軍墓地